

16 ギターがなくちゃ

フラメンコには欠かせない楽器、ギター。ソロはもちろん、歌でも踊りでも、ギターのないフラメンコは考えられないのでは？ 歌や踊りの影に隠れがちで、なかなかスポットを浴びる機会がないギターに今回は光を当ててみましょう。

フラメンコ・ギターはアコースティック・ギター？

エレキギターではない、という意味のアコースティック・ギターではありますが、現在、日本でアコースティック・ギターというと、かつてフォークギターとも呼ばれていた、電気を使わないスティール弦のギターのことを指すことが多いようです。対して、フラメンコ・ギターとクラシック・ギターはナイロン弦を使います。ではフラメンコ・ギターとクラシック・ギターは演奏する曲が違うだけで同じものかという

と、そうではありません。よく似ていますがし、ルーツは一緒ですが、細かいところが違うのです。

クラシック・ギターとの違い／楽器

昔、1台のギターでクラシックとフラメンコの両方を演奏するマヌエル・カーノというギタリストもいましたが、通常は異なったタイプのギターを使います。一般にフラメンコ・ギターはクラシック・ギターよりも軽く、また弦高がクラシック・ギターより低い、つまり、つまり弦と本体の間が狭いです。材質も主にシプレス(糸杉)が使われ、ブランカ白とよばれるように、一般のクラシック・ギターよりも明るい色のものが多いです。(クラシックと同じように暗い色の、ネグロ、黒とよばれるローズウッド製のものも使われます)また、表面板の内側の力木とよば

れる補強のための添え木の張り方も違います。一番簡単な見分け方は、ゴルベ板と呼ばれる、プラスチックの板が胴に貼ってあるかどうか、かもしれません。

これらの違いは、それぞれが求める音やテクニックの違いによるものです。クラシックではより澄んだきれいな音や音量を求め、フラメンコはよりリズムカルで切れ味のいい音を求めます。ゴルベ板も、フラメンコにはボディを指で叩くテクニックがあるためのものです。なお、ソロ演奏の場合、曲によって白と黒を弾き分けるフラメンコ・ギタリストもいます。

ギタリストが作曲家／編曲家

クラシック・ギターとの最も大きな違いは、演奏家の自由度の高さではないでしょうか。クラシックでは基本的に、誰かが(自分が、の場合もありますが)書いた楽譜を演奏しますが、フラメンコでは自由です。誰かが書いた楽譜をその通りに演奏する場合もないとは言いませんが、それは稀で、基本、



フアン・ロドリゲス・ヒメネス『灯火の踊り』
マドリッド・国立ロマンティシズム美術館所蔵
フラメンコ草創期？ ギタリストは後ろ姿です。



パコ・デ・ルセーナ
パリで公演したり、ソロでも活動していたという時代の先駆者。



パコ・デルシア ©Kyoko Shikaze
 フラメンコ・ギターの存在を世界に知らしめたパコ。亡くなった今もなお、すべてのギタリストの指針です。

プロが演奏するのは自分の曲であることが多いのです。全部オリジナルの場合もあれば、誰かの曲の断片と組み合わせる場合もあります。これは歌や踊りの伴奏の時も、ソロの時も一緒です。フラメンコ・ギタリストは演奏能力だけでなく、作曲家&編曲家としての能力も必要とされるのです。特に伴奏では、歌手の歌う曲種はわかっている、どんなメロディーや歌詞が来るのか全くわからないまま、歌手に合わせていくわけで、深く広い知識ととっさの判断力が要求されます。ギタリストには、踊り手、歌手手以上の知識が要求されるのです。

フラメンコ・ギターの歴史

ギターの起源はギリシャ/ローマ説、アラブ説等諸説ありますが、アラブの撥弦楽器ウードからリュートへとつながり、そこから15世紀にビウエラというボディにくびれを持った形の弦楽器が生まれます。それがより庶民的な楽器、ギターへと進化していったので

す。当初、4コース複弦だったものが、5コース複弦のバロックギターとなり、18世紀に現在のギターのような6弦のギターが生まれます。19世紀中頃にアントニオ・トーレス・フラードが現在のクラシック・ギターの原型を作り、そこからマヌエル・ラミレスがデザインし、フラメンコ専用のギター、フラメンコ・ギターが生まれました。

まだ4コース複弦だった時代からの、歌や踊りを伴奏するかき鳴らし、ラスゲアードの技術によるリズムカルな演奏はフラメンコへと受け継がれていきました。ごく初期の、グラナダのギタリスト、フランシスコ・ロドリゲス“エル・ムルシアーノ”(1795～1848)は、ファンダンゴやロンデーニャなどを演奏していたそうです。プロのアルティスタが生まれ、フラメンコが一つのジャンルとして確立していく過程においてギターは常に歌と共にありました。カディス出身のマエストロ・パティエーニョ(1829～1902)は歌伴奏で名を残しましたが、パコ・デルセーナ(1859～1898)のように伴奏だけでなくソロ

をも演奏する者も出はじめ、ラモン・モントージャ(1880～1940)がソロの分野を確立させました。ニーニョ・リカルド(1904～1972)、サビーカス(1912～1990)らの影響を受けたパコ・デルシア(1947～2014)が、ジャズミュージシャンらとの共演なども含め、フラメンコ・ギターに新しい地平を切り開いたのはご存知の通りです。

なお、ここに名を出したギタリストたちはいずれも、舞踊伴奏、歌伴奏を経てソロを演奏するようになったということも記しておきましょう。



1999年のしかぜ
 歌手のアナ・レアル、一人おいて踊り手のラ・チョニト。知り合った時大學生だったんだよね。月日の経つのは早いなあ。

志風恭子/1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。